常若ディスタンス

～現代語訳、穆王・慈童説話の一端～

春瑜 筆「天台方御即位法（資料八）」より

凡例

春瑜 筆「天台方御即位法（資料八）」の現代語訳である。底本は伊藤正義「慈童説話考」『国語国文555号』一九八〇年11月号。乙の『和漢朗詠集』の引用については講談社学術文庫を参照した。

子供むけの現代語訳を想定して、普段あまり見ない漢語・熟語については、ひらたく改めた部分がある。また漢字1字で表現された部分を熟語にした部分もある。

ふりがなについては、原文のままのものと、原文にしめされないなどで私にふった部分があるが、いちいち明示していない。その都合で歴史的仮名遣いと現代仮名遣いが混在している。

表題

天台方の「ご即位法」

または「四海領掌の法」とも、これをいう。

甲　口伝　穆王・慈童説話　cf.「竜馬進奏事」『太平記』

口伝によると周の穆王の時に、驥・驌・驪・驊・騮・騄・駒という8匹の天馬がいたという。または、1匹にして8匹の、よい部分（相）を兼ねそなえていたという。これは二十八宿のうちの房宿の精（霊）のもとで怪（異）をなすともいう。穆王は、これに乗って四荒八極まで行けないところがなかった。

ある時、西天へ十万里の山河を一瞬で飛びこえて、中天竺の舎衛国にいたった。（その）時に釈尊が霊（鷲）山で『法華（経）』を、お説きになっていた。王は馬からおりて、会座に参加して、仏に、おじぎをして、ひきさがって、みんなと一緒に座った。

仏は（王に）お問いになっていうには「汝は、どこの国の

天台方：（真言宗に対して）天台宗サイド。
四海：東西南北の4つの海をしめすことで国土全体。
領掌：手中に収めること。
周：中国の王朝。日本ではウガヤフキアエズの頃とされていた。
穆王：周の王様。
「驌」：@202040;秣（M136）
「騄」：@209011;角（M138）
二十八宿：星空を28に分割する房宿：房。さそり座付近で東方にあたると考えられている区画。
四荒八極：4つの荒野と4つの、はての場所（極地）。
中天竺：インドの中央あたり。
舎衛国：迦毘羅衛国(かびらえこく)の西北の国。南部に祇園精舎がある。
釈尊：釈迦如来・釈迦牟尼世尊。仏教の開祖。
霊山(りょうぜん)：霊鷲山に同じ。摩訶陀国(まがだこく)にあるとされる。舎衛国と微妙にズレる。
法華経：釈迦が説いたとされる、お経。
会座：法会(ほうえ)の場。
仏：釈尊のこと。以下同じ。
みんなと一緒：原文「一面」

人か？」。王は答えて、申すには「我は、これ震旦国の王である」と。仏は、かさねて、お問いになる「いいでしょう。今、この会場に、やってきた。我は治国の法を持っている。汝は受持したいと思うか？　どうでしょう？」王が、申すには「ねがわくば、したしく受けとって、まつりごとをとりおこなっていきたい。理民安国の功徳をほどこしたい」

その時、世尊は漢語を使って（『法華経』の）四要品の中の8句の偈を穆王に、お授けになられた。今の『法花（経）』の中に経律の法門があるという。深秘の文が、これである。（穆）王は震旦に帰って深く心底に秘めて世(間)には伝えなかった。

この時、慈童という子供（童）が王の寵愛によって帝の、かたわらにひかえていた。ある時、この童は君の位をないがしろにして（慈童を寵愛する）あまりに、誤って、帝の、お枕の上を越えてしまった。群臣が議（論）していうには「罪科は浅くない。そういっても、（この）事は誤っての出来事であるので、死罪を1等ゆるして、遠流にさせるべきだ」と（王に）申しあげた。群議が、ほんとうに終わることがなかったので、慈童を酈縣という深山へ流した。かの山は帝城を、はなれること三百里、山が深いので鳥さえも鳴かない、雲が（たちこめて）くらいのでトラやオオカミがたくさんいた。この山に入るものは、生きて帰るということがなかった。

王は慈童を、おあわれみになられて、かの8句の内の普門品にある2句の偈を、ひそかに慈童に、お授けになって「毎日、十方を一礼して、この文を1遍、唱えなさい」と、おおせになられた。

慈童は、ついに酈縣に流されて、深山・幽谷の底にすてられてしまった。慈童は君の、ありがたいおおせにしたがって、毎朝、この文を唱えた。忘れないようにと、かたわらにあった菊の葉に、この文を書いておいた。その後、この菊の葉についた露が自然と落ちて流れに入った。谷水がみな天の霊薬となって、慈童は、のどがかわくと、この水を飲むと、天の甘露のようで

震旦国：中国の別名。
受持：教えを心に、きざみこんで忘れないこと。
したしく受けとって、まつりごとをとりおこなって：原文「信受奉行」
世尊：釈尊のこと。
四要品：『法華経』の重要な4つの部分。
偈：短い詩。
経律：仏の説いた教えと生活の上の、きまりごと。
法門：教えの内容によって分かれる仏教内のグループ。
慈童：1説には秦の始皇帝の時の人物。
王・帝・君：王のこと。いいまわしが、くり返さないように言葉を変えている。
群臣：王のけらいたち。
罪科：つみと、あやまち。
遠流：都から遠い場所に住まわせることで罪を、つぐなさせること。
帝城：帝のいる城。都。
普門品：『法華経』の一部。観音経とも。
十方：四方八方と天地の10の方向。
ありがたいおおせにしたがって：原文「恩命ニマカセテ」
霊薬：不思議な効能のある薬。
甘露：天の神々の飲み物。甘い液体。

あった。味は百種類の珍しい（食べ物）より、まさっていた。それだけでなく、天人が花をささげて、鬼神が、まとめひきいて奉仕した。トラやサル（のような）悪獣の（おそってくる）心配がなくなって、かえって、換骨・羽化の仙人になった。

この谷水の流れをくんで飲んだ民（衆）の三十余家は、みんな病が、すみやかに消滅して不老不死の上寿をたもった。

その後、時代が、うつろって八百余歳まで、かの慈童は、少年の（容）ぼうがあって衰老の、ようすがなかった。魏の文帝の時に、彭祖と名（前）をあらためて、この術を文帝に授けてさしあげた。帝は、これを受けて菊花の盃を伝えて万歳の寿（命）となった。今の重陽の宴というのは、これである。その後より皇太子が位を天から、お受けになる時に、この文を受持しなさる。

これによって、普門品を『当途王経』ともうすのだ。この文が、我が朝に伝わって、代々の聖主が、ご即位の日に、必ず受持しなさる。もしも、幼主の君の践祚の時は、摂政が、まず習受して、ご治世の始めに君に、お授けさしあげる。この8句の偈は、三国伝来にして理世安民の治略、除災与楽の要術である。この8句の偈をば、天台の即位の法ともいい、四海領掌の法とももうすのだ。

その次第は口伝に、これがある。〔最秘密の法である〕

乙 1説 彭祖仙人 cf.「菊土童(D)（資料一）」

また1説にいうには、9月9日の酒は寒温の2気の境（界）なので、酒を今日から、わかして飲むので、いろいろな病がおこらない。ゆえに寒をふせぐ力が強くなるのである。

また菊をつかうことは、昔、魏の文帝が、お生まれになった時、紫雲が車輪のようになって、殿上にかかった。瑞相・奇特の霊王でおありだ。7歳で（帝の）位につき、天下を、お治めになった。（その）時に（観）相者があっていうには、

味は百種類の珍しい食べ物：原文「宛(アタカ)百味ノ珍(チン)」まとめひきいて：原文「手ヲ束(ツカネ)テ」

換骨・羽化：換骨は換骨奪胎か？骨をかえること。羽化はサナギがチョウになるように人間が仙人になること。

上寿：長寿の最高ランク。

容ぼう：原文「貌(カヲハセ)」貌の異体字で、ハセには下半身の意味もあるのか？

重陽の宴：9月9日の節会(せちえ)。

当途王経：ルビ ママ。現代かなだと「とうづおうきょう」か？

我が朝：日本のこと。

聖主：天皇。

践祚：天皇の位を引き継ぐこと。

摂政：おさない天皇を助ける人。

摂籙(せつろく)の家の人がなる。

習受：習って、それをさずける

三国伝来：インド・中国・日本の3国に伝わった。

理世安民の治略：国を治めることを格調高くいった語。

除災与楽の要術：災（難）をさけ、(安)楽をあたえる、かなめとなる方法。要術には妖術の、ふくみも？

口伝：「丙」にあたるか？

〔〕内は割注。

寒温：季節を寒（冬）と温（夏）の力関係ととらえ、秋分（当時は8月中とされる）と春分を寒温の境界と考えた。重陽が秋分と近いので、このような説が、うまれたのでは？

瑞相：めでたいしるし。紫雲を文帝の徳と考えた。

奇特：すぐれて、めずらしいこと。

観相者：人相を見る人。占い師。

「ご寿命は15（歳）を、すぎることはない」と云々。帝は、これを、お聞きになられ、15の齢が近づくほどに、嘆きを、お持ちになることが少なくなかった。ここに彭祖という仙人が帝の徳を感じて、酈縣の菊をとって9月9日に持参し、これを献（上）した。王は、これを服（用）なさって、寿命が長遠に、おなりになった。

そもそも、この菊の因縁は、周の穆王が8匹の駒にのって四荒八極に（いったりきたりして）遊んでいた。ある時、山川幽境をすぎて、霊山で浄土の説、法華のみぎり（を釈尊が、お説きになるの）に参（加）した。「サッタラマ・フンタリキャ・ソタラン」という『妙法（蓮華経）』の題目を聞いたのを覚えていて、帰ってきて深く心の底におさめて（他）人には教えなかった。ただ、新帝の位につく時に、これを授けた。

順々に伝来して、秦の始皇帝の時、殿上（していた）侍童（慈童）が、あやまって、王の沉の枕を、そこなってしまった。とがを流罪とさばいて、これを酈縣に、つかわす時に、王が、あわみにたえられなくなって、侍童を門から、（引き）返しになられて、ひそかに（慈童の）耳に語っていうには、

「汝の罪は、法の、かぎりだから、しぶしぶ罰をあたえる。酈縣は人はいない食事をしていきていけるものがいるだろうか。ヤマイヌやオオカミがキバをといでいて畏怖がかぎりない。このような時にも必ず、この文を唱えなさい。このことは昔から王位の重宝として臣下にも聞かしていない。我は、これを先王より伝えられてから、ただ、後王に伝えることを期（待）している。しかしながら、深く汝を哀しむから、法を破って、今、汝に授ける。軽い心で処（置）しないで、つねに、これを持ちなさい」

こうして童子（慈童）は、これをいただいて、涙をぬぐって去っていった。王の教えのようにしていると、すべての諸種の思いがかなって、万事が、とぼしくなかった。瀧水が菊を云々。しかじか。うんぬん。観相者の説明は続くが、それをはぶく記号。

そもそも……ここから魏より過去に、さかのぼる。
因縁：由来。縁起。
幽境：うきよばなれした静かなところ。
砌：とき。おり。
サッタラマ……法華経の題目を音写（インドの言葉を漢字で表現）している。
サッタラマ：妙法の意味。達磨は「教え」を意味するダルマという言葉。
フンタリキャ：（白い）蓮華（ハスのはな）の意味。分陀利華とも書く、ふんだりけ。
ソタラン：経の意味。修多羅とも書く、スートラ。
題目：本のタイトル。とくに『法華経』のタイトル「妙法蓮華経」をさす。
聞いたのを覚えていて：原文「聞持（キ、モチ）」
順々に：原文「次第ニ」
沉：沈の異体字。枕と、つくりが共通なことと、皇帝の一人称「朕（ちん）」を連想させる。耽（ふけるとも関連が？
しぶしぶ：原文「怒」：@050652;跟（M109）。懋（なまじい）の国字とも。
罰：原文「辜」訓は「つみ」だが、文意より改める。
食事をして……：原文「哺養、誰ニカ有ラン」
ヤマイヌやオオカミ：原文「犲狼（サイロウ）」
畏怖：原文「怖畏」おそれ。聞かして：原文「開カシメ」
期待：原文「期（コ）ス」
諸種：原文「所須（ショシュ）」ころみに、この字をあてる。たぶん「所須」という言葉があるんだけど、手持ちの辞書には載ってない。文意的には「もろもろ」か「ねがいごと」のような漢語だと思う。

うつ（ところが）あって童子は、これをめでて、菊にむかって、たびたび、かの文を唱えた。菊は、この妙法のまじないによって自然に薬となった。童子は菊水を飲んで、たちまち仙人となって、梁の文王の時になって、仙童（慈童）は村里にでた。人があって、この（理由）を聞くと、つまびらかに、ことの起こりを説（明）した。すでに七百歳を経（過）していた。

これによって、酈縣の菊は、すでに、つねに若く不老の薬であると知られた。その源をさぐると、これは『妙法（蓮華経）』の力であった。不老不死の金言は本当であるものだ。

故事を漢武に採れば　すなはち赤萸、官人の衣に挿めり
旧跡を魏文に尋ぬれば　すなはち黄花、彭祖の術を助く

（故事に漢の武（帝）を採（用）すると、赤萸（の実）は（その効能から）宮人の衣にさしこまれ（もちかえられ）た。
旧跡を魏の文（帝）に、たずねると、黄花（菊）が彭祖の（仙）術を（補）助した）

谷水、花を洗ふ　下流を汲んで
上寿を得たる者は　三十余家
地脈、味ひを和す　日精を喰って
年顔を駐めたる者は　五百箇歳

（谷水が（菊）花をあらって、下流で（それを）くんで、上寿を得たものは三十あまりの家。
地脈の味が、くわわって（その水を飲んで）、日精（草）を食べて、よわいと顔（色）をとどめたものは五百ヶ歳（まで生きた））

酈縣の村閭は皆、潤屋す　陶家の児子は垂堂せず

（酈縣の村里は　みな　うるおった（家）屋で、陶（淵明）の家の子供は（瓦が落ちてきそうな）堂の軒下には入らない）

妙法のまじないによって：原文「妙法ニ咒セラレテ」
仙童：仙人の童子。
村里：原文「邑里」
つまびらかに：原文「具（ツフサニ」
ことの起こり：原文「本縁」
すでに、つねに若く：原文「已常少」物語での慈童の姿をまとめている。
金言：釈尊の言葉。

ここから『和漢朗詠集』から3つの漢詩を引用する。
故事を…：紀長谷雄 262『和漢朗詠集』
漢武：漢の武帝。
赤萸：呉茱萸(ごしゅゆ)。からはじかみ。重陽に茱萸の実を赤い袋に入れた。
魏文：魏の文帝。

谷水、花を…：紀長谷雄 264『和漢朗詠集』
地脈：原文「地脉(チハク)」地下水の流れる道。
日精草：菊の異名。

酈縣の村閭…：三善清行(みよしのきよやす)269『和漢朗詠集』
陶家：1説に菊好きで有名な陶淵明のこととされるが、李白の漢詩に「宴陶家亭子」というのもある。また垂堂に知見のある陶（芸）家＝瓦屋のような解釈も可能か？
児子：原文「兒子」
垂堂：垂堂之戒。子供は危険から、へだてて育てられるべきという、いましめ。縁側の階段が危険とも。
軒下には入ら：「垂」には「端に近づく」という意味も。

丙　四海領掌の印明　偈と印明

（ここからは甲乙の物語をうけ、物語で、あかされなかった『法華経』の8句の偈と手のカタチを、しるしとする印相によって、四海領掌のイニシエーション（秘密の儀式）のようすを記述する次第の部分）

表題

四海領掌の印と明〔『法華（経）』の四要品をつけたす。これは、即位の法である〕

次第

智拳印（をむすべ）　ぁ（カ）（と唱えよ）〔方便品（にあたる）〕

十方仏土中（十方の仏（国）土のうちに）

唯有一乗法（ただ一乗の法がある）

（と念じよ）

合蓮華（の印をむすべ）　ぃ（ラ）（と唱えよ）〔安楽行品（にあたる）〕

観一切法（すべての（仏の説いた）法をみるに）

空如実相（「空」は実相のようである）

（と念じよ）

八葉印（をむすべ）　ぢ（イー）（と唱えよ）〔寿量品（にあたる）〕

仏語実不虚（仏の言葉は、まことにウソがない）

如医善方便（医（者）が、すぐれた（ウソも）方便（で子供を教育したの）と同じだ）

（と念じよ）

仏部（の印をむすべ）　ぁ（アク）（と唱えよ）〔普門品（にあたる）〕

慈眼視衆生（（観音は）慈（悲）の目で人々をみている）

福聚海無量（福（徳）の、あつまる（ことは）海のように、はかりしれない）

（と念じよ）

印と明：原文「印明」印は手のカタチ。明は真言の意味でインドの言葉。ここでは梵字1字で仏を意味する種子を使用か？

〔〕内は割注。

「ぁ（カ）」：@102642侍(M119)方便品：品は『法華経』を分割する単位。

一乗法：ベスト（1番）の乗り物の仏典。『法華経』のこと。

合蓮華：開花していないハスの花。（さとりを開いていない）普通の人を意味する。後段の「仏部」と対応か？

「ぃ（ラ）」：@102485差(M119)似たような字に、

「ぅ（ラ）」：@102486査(M119)があり文意から作る。

一切：すべて

空：この世のことは仮のことで、実体がないということ。

実相：この世の、ありのままの姿。如実とも。

「観一切法空。如実相」と区切るのが一般的。あえて4言の対句にしている。

「ぢ（イー）」：@101904寒(M119)虚：事実でないこと。

医：自分が死んだとウソをついて子供を、さとしたとされる医者。

方便：てだて。仏教の教えを説明するのにつくられた仮の話。

「ぁ（アク）」：@101912完(M119)衆生：いきとしいけるもの。

知恵の象徴である智拳印をむすび、合蓮華−八葉印−仏部を経過することで、蓮の花が開花して実を結ぶことになぞらえて、人間が（さとりをひらき）仏になることを意味するか？

これを8句の文という。
また、1説に4句の文というときは、

慈眼視衆生（（観音は）慈（悲）の目で人々をみている）
福聚海無量（福（徳）の、あつまる（ことは）海のように、はかりしれない）
心念不空過（心に（観音を）つよく思って、むなしく過ごすことがなければ）
能滅諸有苦（うまく諸（々）ある「苦」が、なくなるであろう）
印明は、前とおなじ。云々

慈眼視衆生…：この4句は、すべて普門品より。
苦：欲望によっておこる苦悩や不幸。
印明：原文「印名」智拳印をむすび「ㄱ(カ)」と唱え「慈眼視衆生」と念ずる。合蓮華の印をむすんで「ㄹ(ラ)」と唱え「福聚海無量」と念ずる…の順。

丁 異説 大タヽラ尊 cf.「異説」『日本書紀私見聞』

表題？ (0)

異説にいうには、

素盞烏尊・大タヽラ尊・閻魔王 (1)

素盞烏尊が日本国を御嫡子の大タヽラ尊に、これを、おゆずりになって、自分は地下の根の国を領（地）として、お住みになられた。根の国とは地獄をいうのだ。よって閻魔王とはソサノヲ尊である。本地は地蔵菩薩である。地蔵は地獄の主で、おありであると云々。

国譲り (2)

大タヽラ尊とは今の山王（権現）であられる。父の素盞烏より日本国を、ゆずりえていらっしゃるところに、天照太神は、おい御前の大タヽラに、もうすには「我は天を領（地）として、地を領（地）としていない。日本国を我にください」と、おもとめになられた。大タヽラ尊が申すには「まず、お治めになったら、お返しくださる（ことを、お約束ください）」といって、この国を天照太神に、おゆずりになる時に、国を治める時は治国利民の法を知らないで、かなうものではないので、件の即位の法門を、そえて、おさずけになられた。

天竺・唐土・我が朝 (3)

この大事は、如来が、お生まれになった時をたずねると、

嫡子：あととり。
大タヽラ尊：記紀神話には見えない尊名。
自分：原文「我」
閻魔王：原文「炎广王」
ソサノヲ：素盞烏のこと。
本地：本地仏(ほんちぶつ)。神様に仏様をわりふる考え方。素盞烏が根の国にいることから地獄を連想して、地獄の閻魔大王は地蔵菩薩の化身とされる。
山王権現：比叡山の守護神。この文章が天台方のものであることと大きく関わる。
ゆずりえていらっしゃる：原文「譲得テマス」
おい御前：御前は、かるい尊称。甥さん、おい様。
お治めに：原文「御知行」
治国利民の法：即位法の別名。
如来：釈尊のこと。
お生まれになった：原文「出世」

天竺にては頻婆娑羅王、唐土では周の穆王、我が朝では神武天皇まで、師資相承なされている。これはすなわち、法華一部の慈悲の大事である。王位につく人、以外は、けして（他）人には知らせないと云々。

釈尊未然・慈悲の法 (4)

我が朝には釈尊の、まだ、お生まれになっていない以前に、伊サナキ・伊サナミからソサノヲ尊に御相伝があった。次に大タ、ラ尊、次に天照太神に御相伝があった。この法は、もっぱら大慈悲を中心とする。したがってソサノヲ尊は折伏の慈悲をつかさどりになっている。折伏の時は閻魔王、摂受の時は地蔵菩薩である。ちょっと見たところは完全には理解できないようだが、和光の利益は凡（人）の考えでは（推）測するのは難しいものである。

山王の遷座・大宮権現の本地 (5)

山王（権現）というのは、もとは大和国三輪郡に、おありだったのが、伝教大師が、お生まれになって、ナガラ山に延暦寺を建てた。円頓（戒）・一乗の教法を、おひろめになった時、かの（三輪）明神が三輪の里を、おきでて比叡山の麓に住み、天台純円の教相を守護なさるものである。すなわち大宮権現がこれである。この権現とは、はるか昔に、さとられた釈迦が五百の、さまざまな如来となって、三世の諸仏の本師として、十方の分身の総体である。とりわけて、応身の、とおり名で慈悲のようすである。ゆえに釈迦は、とりもなおさず観音であり、法華の教団の宝として、おあらわれになる。ゆえに、もっとも、この法門の主である。

山王は諾冉の孫・教理的解釈 (6)

また山王（権現）を諸神のもとと申すことは、前から、のべたことのように地神のはじめの、伊サナキ・伊サナミの、お孫ということである。山家の、御（解）釈にいうには、山王とは万法のすべての名、すべての実体、縦にしない横にしない、

天竺：インド。
頻婆娑羅王：摩訶陀国の王。阿闍世の父。
唐土：中国。
神武天皇：初代天皇。釈迦入滅後の人と認識されていた。
師資相承：原文「資師相承」師（匠）と資（たすけ・弟子）によってうけつがれる。
法華：原文「法花」
一部：『法華経』ひとそろえ。
以外：原文「ヨリ外」
折伏：悪をくじくこと。仏教にそむくひとを力づくで従わせる。
摂受：相手の意見を聞きながら仏教の道にみちびくこと。折伏と対の考え方。
ちょっと見たところは：原文「一旦」
完全には理解できないようだが：原文「不審ニ似タレトモ」
和光：仏の深い考え（光）を、やわらげること。
利益：恩恵や幸福。
凡人の考え：原文「凡慮」
大和国三輪郡：奈良県桜井市あたり。
ナガラ山：長等山。滋賀県の三井寺の裏山。
円頓戒：大乗戒。天台宗における僧になるてつづき。
一乗の教法：『法華経』の異名。
ベスト（1番）な乗り物。
純円：円頓戒の「円」をうけて、それが純（粋）の意味か？
はるか昔に、さとられた：原文「久遠実成」
さまざまな：原文「塵点ノ」
三世：過去・現在・未来。
諸仏：さなざまな仏。
本師：根本の師匠。釈迦を、さしていう。
総体：原文「惣躰」
応身：相手に応じてあらわれた仏のすがた。
とおり名：原文「通号」
教団の宝：原文「僧宝」
山家：延暦寺の別名。
万法のすべての名：原文「万法都名」
すべての実体：原文「一円ノ實躰」

一心三徳、これをしめす名（前）である。

三輪明神の異名(7)

三輪明神は〔大巳貴神、または大国主とも云々〕書（物）によって、たくさんの名（前）がある。今の大タ、ラ尊は同体異名であるか？

正長2（1429）年〔己酉〕3月17日　書写し終わった。
春瑜〔これ29才〕

一心三徳：仏のこころと、救護する恩徳と、煩悩を断つ断徳と、智徳、という3つの徳。ちなみに一心三観は天台宗の教義。

同体異名：原文「異躰同名」文意により改める。同じものを別の名前でよぶこと。大物主、葦原醜男、大黒天など。

己酉：原文「巳酉」

【なかがき〜今のところの設計】

「常若ディスタンス」の現代語訳はここまで。ＰＤＦの用紙が、あまってしまったので、これからのことを少し書いておくと「常若ディスタンス」は「狐(仮題)」という現代語訳と、ともすれば「アマテラス(仮題)」または「ノータイトル」という現代語訳と2部作とか3部作になるような感じだと思う。その解説として「常若ディスタンス」の部分をあつかったのが「双頭の龍(仮題)」の「前編」の予定で、「双頭の龍」というのは、春瑜が、なぜ「常若ディスタンス」を書写したのかという理由を、地域的な理由と、歴史的な理由から考えられるのではないかという話で、双頭の龍というのは春瑜がうまれる、だいぶ前に天皇家が持明院統と大覚寺統の2つの〈血脈〉に割かれていた――1つの体に2つの頭があるような状態のこと、そして龍は〈王権〉を象徴する霊獣――を意味していて、今のところ個人的に「丁」の文章の、つくられかたに、双頭の龍を打破しようとした〈異形〉の萌芽があるのではないか（ここまでネタバレして大丈夫なのか？）というような話になる予定。

「常若ディスタンス」を始める前に、偶然に『神皇正統記』の地神五代の年代と日本の神話とインドや中国との接続を調べていて、それが現代語訳にも「双頭の龍（前編）」の着想にも、おおいに役にたった。既知のことを、しらべて・まとめても意味がないんだろうけど接続として、新たな知見をもたらすこともあるんだな。

最後に「常若ディスタンス」の常若は慈童のことでディスタンスは距離のこと。距離には物理的な距離と心的な距離があって、そのギャップが萌えポイントなんだよね。

2016.11.25